

夢魔の精

2

ぼんやりとベットに腰掛けていたと思うと、急に机に向かいパソコンを操作する。楽しみながら、日課のようにしていた日記を更新するためではない。

さまざまな言葉で検索を試みる。やはり、不安を煽るような内容しか出てこない。同時に、自分の大きな疑問に答えてくれるものは出てこない。

部活も最近では、休んでいる。それでもその準備をして家を出て、帰宅時間も遅めにしているのは、母親たちにそれを悟られないようにするためだ。

美莉は、そんなカモフラージュを続けることも、苦痛になり始めていた。

「あなた最近、体の調子でも悪いの？」

夕食の時、母が不意に話しかけてきた。

「別に。どうして？」

美莉は、胸の鼓動が大きく脈打つのを感している。

「今日、お買いものの途中で絵理ちゃんに会ったの。それで美莉ちゃん、大丈夫ですかって聞かれて」

美莉は自分の懸命な努力が、呆気なく崩されたことを悔やんだ。仲の良いクラスメイトも、今は憎んだ。

「姉ちゃん、さぼりか」

「うるさい」

美莉は横からちょっかいを出してきた弟、潤那を棘のある声で叱る。

「まあ、男と遊んでる方が楽しい年頃だからね」

潤那はかえって反発し、憎まれ口を叩く。けれどもそれは、今の美莉には最も言われたくない言葉の一つだった。

「うるさいってば。あんた、生意気なのよ」

黙って食事をしていた父、幸次が思わず手を止めた。母の菜穂も大きく目を見開く。

「何よ」

美莉は父と母にも突き刺さるような声を発した。それはある種の凄みさえ感じさせるものだった。

「何でもないのよ」

美莉は母の言葉を確認すると、そのまま食事を続けた。

「ところで潤那。おまえ欲しいゲームがあるって言ってなかったか」

幸次が急に、潤那に向かって別の話題を振った。

「えっ、買ってくれるの」

「いや。参考までにな」

「ちえっ」

おそらく、このまだ無邪気さが残る弟が、姉に向かってまた何か言いたそうにしていたのに幸次は気づき、慌てて機先を制しておいのだろう。

「ねえ、あなた」

「うん？」

パジャマ姿で新聞を広げくつろぐ幸次の前に、菜穂は座った。

「美莉のことなんだけど」

「うん」

幸次は新聞をたたんで、置いた。

「少し変だと思わない？」

言葉よりももっと深刻な顔で、菜穂は問いかける。

「そうだよなあ」

短い返事のあとで幸次が顔を上げると、妻はじっとその様子を見つめている。

「まあ、部活をさぼって何をやってるのかなあ。変な遊びとかじゃなければいいが」

「違うのよ」

「違うって、何が？」

夫に尋ねてみても、望む返事は返ってはこないと感じたのか、菜穂がいきなり話し出した。

「ええ、そういうのとは違うんじゃないかって・・・これは私の考え違いかもしれないけど」
そしてひと呼吸おいて、続ける。

「ここしばらく、妙にイライラしてるの。あなたは、そう思わない？」

「うーん、でも潤那の奴が余計なちよっかい出してくるのが、鬱陶しいんじゃないか。年頃だし」

「違うわ。やっぱり、男親にはわからないかしら」

菜穂は爪を噛んだ。

「何が」

今度は幸次がむきになる。

「いいわ。私から聞いてみる。これは女親じゃないと」

幸次は、妻の決意を決めたような厳しい目を、キョトンとした表情で見つめ、再び新聞を取ると顔を覆い隠すように広げて読み始めた。

翌日、美莉はいつもより早い時間に帰って来た。「今日からは部活に出るから」と断ったが、菜穂が用事があるから帰って来てほしいと言う。何の用事かと聞いても、帰って来てから話すと取りあってくれなかった。

「おかえり」

迎えに出た菜穂は、普段着のままだ。外出などではないらしい。

「何なのよ。用事って」

美莉の言葉は、相変わらずナイフのように尖っている。

「うん。カバン置いてらっしゃい」

菜穂はそれをいなすように答えた。

「正直に答えてね」

向きあった母の目は、真剣だった。言葉にも、いつにない力強さがあった。

「だから何」

そう反駁しかけた美莉は、言いながら身じろいだ。それだけ、母の目は真剣で、まるで美莉の体をごんじがらめに捉えてくるような迫力があつた。

「体の具合、悪いんじゃないの？」

「ちょっと熱はあるけど・・・」

「どれぐらい前から？ それだけ？」

母の問いかけは、美莉の体を射るように襲いかかってくる。

「少し、気分も悪いっていうか」

「どんな風に？」

「だからそれだけだつてば。ちゃんと薬局でお薬も買って飲んでるから」

美莉は駄々っ子がわめくように答える。

「でも、効かないんでしょ？」

美莉は反論できない。

「ねえあなた、生理とかちゃんときてる？」

美莉は頷きも、否定もしない。目を逸らし、ただ石のように固まった。

「正直に答えなさい。私はあなたの母親なんだから」

それでも、美莉はピクリとも動かない。

「娘の体調を心配しない訳にはいかないの」

そして美莉は、ようやく観念したように小さく頷いた。そして、小動物のように体が小刻みに震え始めた。

「何日ぐらい、遅れてるの？」

母は怯える娘の様子を目の前にしたためか、優しい声色になる。

美莉は生理の遅れの事、微熱が続いている事、イライラが止まらない事などを、小さな声で話し始めた。

「そう。ありがとう。素直に話してくれて」

母は娘に、小さく頭を下げた。

「それで、あなた心当たりは？」

美莉はこれまで口にしてきた事すべてを振り払うように、首を振った。

「お付き合いしている人、いたわよね」

母の言葉を振り払うように、また強く首を振り、答える。

「付き合っている人は、いるわよ。でもそんな事、してないわ。してないのよ」

美莉の訴えかけるような目には、涙のようなものさえ浮かんでいた。

「本当なの？」

美莉が頷く。その拍子に、涙が一粒二粒、テーブルに落ちた。

「だったら、他の病気かもしれないじゃない。早く病院で調べてもらわないと」

美莉からの返事は、ない。

「想像妊娠って事だってあるのよ」

「でも、私はそんな事・・・」

「わかってるわ。でもね、そんな事してなくたってなる人もいるの」

「そうなの？」

美莉がびっくりしたような目で、問い返す。

「ええ。ママのお友達に聞いた事があるの。神経質な人が、なる場合があるんですって」

「そう・・・」

「あなた神経質なところがあるから。明日早速、病院に行きましょうね」

菜穂は娘の安心した表情をさらに励ますように、強く抱きよせた。

怒れる悪魔-1

砂漠に、怒号が響いた。

岩が、風に揺れるか細い木々のように震えた。

「アシュラット、アシュラット」

その野太い声に気圧され、耐えきれなくなったかのように、巨大な岩が砕け散る。

「いるんだろうが、アシュラット」

砂漠の風がそれに反発するように強さを増すが、その巨体は揺るがない。いやこの世界の風は、むしろこの荒々しい振る舞いを歓迎して、激しく吹き始めているのだろうか。

「うるさいぞ」

猛り狂う砂漠に、甲高い声が響き渡った。風の騒ぎが、一斉に鎮まる。

「なんだ、ヤベルじゃないか」

甲高い声の主は、あの奇妙なコンニャク姿の悪魔、モルマだった。

「貴様、こんな所で何をしている」

ヤベルと呼ばれた巨大なカバのような大男は、モルマを見下ろす。

「グヒィ、グヒヒヒヒ」

モルマは、嫌らしく笑うと、巨大なカバ、ヤベルを岩陰に招いた。

「面白い遊び道具が手に入った」

そこには、鎖で繋がれた天使の姿があった。ヴァギナのそばにペニスを付けられた哀れな姿。いやモルマの言葉で言えば（気高く美しい存在も、ただの変態）と言った方がこの世界では正しいのだろうか。

「こいつは？」

カバが舐めるようにしてその姿を見る。よく見るとその巨体には模様のような、痣のようなものがたくさんあり、もっと良く見るとそれらはひとつひとつ、狐、狼といった動物、魚や鳥の顔をしている。

「面白いだろう。変態天使様だぜ」

モルマは、女天使の股間に備わった男性器を指で軽く弾いた。するとそれは、生き物のように太さを変え、上下に小さく動いた。

「お前も遊べよ。このオモチャだよ」

モルマは何度も、同じ動作を繰り返す。天使の白い肌は、熱を浴びるように赤く、火照っていく。

「ふんっ」

ヤベルも、天使のその火照った体に触れた。けれどもペニスには目もくれず、みぞおちあたりを思い切り、殴りつけた。さすがは天使と言ったところだろうか、大男のパンチを食らったら折れてしまいそうな華奢な体は、ひしゃげる事はなかった。もっとも天使の口からは、激しい嗚咽とともに大量の唾液や胃液が流れ落ちてきたが。

「おいおい。お前の遊び方は荒っぽいぞ。これじゃ壊れてしまう」

「ふんっ」

狼狽したモルマの言葉に、ヤベルはそっぽを向く。

「その通りだよ。もっと、丁寧に扱ってくれないと」

知的な声が聞こえてきたかと思うと、辺りは強烈な臭気が漂った。

怒れる悪魔-2

「臭い、臭い」

モルマがわめく。ヤベルの方は、微動だにせず、かわりに現れた男に向かって怒鳴った。

「やっと出てきたか、アシュラット」

それは寝ぼけたような目をした悪魔、アシュラットだった。

「久しぶりだなあ、ヤベル」

アシュラットは跨ったネコの足で、ヤベルのもとに行く。

「境無界で、神や天使と激しくやり合っていると聞いたが」

「ああ」

ヤベルはぶっきらぼうに頷いた。

「戦況はどうだ？」

「うちの軍勢の半分がやられたぞ」

「なんだ、情けない奴らだ」

モルマが腹、いやコンニャクの中央に付いた顔を抱えて、笑った。

「お前のせいだぞ、アシュラット！」

モルマの言葉も気に障ったのだろう。ヤベルは、さっきまでとは比べ物にならないほど、激しく怒鳴った。岩が強風に晒された木の葉のように、砕けて風に舞った。

「怒鳴るなよ~」

「私のせい、とは？」

情けない声を出すモルマとは対照的に、相変わらずアシュラットの声には抑揚がない。

「『天使が一人捕まった。我々の誇りにかけて、取り返すぞ』って事で、神や天使は息巻いている」

「これの事か？」

「ああ、そうだろうよ」

アシュラットが指をさした先にいたのは、岩に括りつけられて天使。ヤベルはまた、その腹を殴りつけ、天使の口からは大量の胃液が流れ落ちる。

「おい、止めろって」

そう言うモルマは、天使の殴られた場所を心配する代わりに、地面に落ちた胃液をすくい上げ、舐めた。

「へへ、高貴な方の腹の水だからな」

天使は苦しみのためか羞恥のせいか、目を閉じている。固く閉じられたそのあたりが、うっすらと光っている。

「グヒィ、おまえを助けに皆さま必死で戦ってるんだとよ」

モルマはそれがお気に入りの動作なのだろう。天使のペニスを、指で弾く。

「こんな変態に成り下がったのをよ」

天使の頬がみるみるうちに赤く染まるのは、モルマの行為のためか、言葉のせいか。

「おまえの責任だぞ。軍勢を出して、加勢しろ。アシュラット」

「いや」

アシュラットはヤベルの援軍の要請を、軽く拒絶する。

「彼らは私に腹を立てているのだろうか？ ならばすぐ出て行くのは、面白くない」

「何だと？」

ヤベルが殺気立つ。

「焦らして焦らして、その方が神や天使のような単純な連中には効くのだ。援軍なら、他にもいるだろう」

「それはそうだが・・・」

悪魔ヤベルにしても、この理屈は筋の通ったものだろう。

「まったくよ。偽善者ぶりやがってよお。神や天使ってのは。どうせ無駄な事なのに」

繋がれた天使で遊んでいるモルマも、二人の話に関心はあるらしい。

「ドンメルやケイムたちに話してみろ。すっ飛んでいくぞ」

「ああ、あいつらならイクイク。グヒヒヒヒヒ」

天使の股間で遊びながら、モルマは相槌を打った。

「わかった。行ってみる。しかしもう一発だけ、こいつを殴らせろ」

ヤベルはまた、天使の腹を殴りつけた。これまでよりも強烈だったのか、天使は鎖が千切れそうなばかりに、激しく悶えた。その股間を、モルマは細かくいじる。もしかしたらヤベルの野蛮な振る舞いは、この悪魔流のオモチャでの遊び方なのかもしれない。

哀れな告知-1

うなだれて歩く、二人の女の姿があった。母と娘。菜穂と美莉。

約束通りふたりは、病院へ行った。美莉は子どもじゃないんだから、と共に行く事を嫌がったが、念のためと母も同行した。

診察を終えると、医者は待合室にいる母親を呼ぶようにと看護婦に伝えた。

「悪い病気なんですか？ 先生」

美莉の問いかけの後に医師が向けた眼差しは、美莉の十七年間の人生で味わう、最も軽蔑に満ちたものだったろう。まだその理由がわからない美莉は、この時ひどい反感をこの医師に持ったに違いない。

看護婦に呼ばれ、母が入って来た。

「先生。娘は一体何が」

医師は母親に対しても、娘に向けたのと同じ種類の眼差しを浴びせた。

「妊娠、されてますね」

小さな病室に、ながい沈黙が流れた。二度三度、医者が深いため息をついても、母娘はピクリとも動かなかった。

哀れな告知-2

結局、家に帰り着くまで美莉と菜穂は一言も言葉を交わさなかった。

「美莉、待ちなさい」

家に着くと、まっすぐに自分の部屋に向かおうとした娘を、母は引き止めた。

「ちょっと座って」

美莉が座らないのを見ると、ウェイトレスのようにイスを引いた。それでも動かない娘の両肩に手をかけ、少しだけ、圧をかけようやく座らせた。

けれども、言葉が出てこない。

いざ娘と話をする状況をつくっても、言葉は出てこない。

「ママ、私知らないのよ」

娘の方が、口を開いてきた。

「本当に、覚えがないのよ」

娘は、堰をきったように口を開く。すべてが同じ内容だった。母は、それを受けるたびに小さく、頷く。

「ママ、信じてよ」

美莉の口から発せられているのは、もはや言葉ではなく感情そのものだった。

「知らないのよ」

「でもね、何もなしで妊娠するはずがないでしょう」

娘の感情がようやく導き出した母の言葉は、短かった。けれども、それはひどく抑揚がなく、母は娘の顔を見なかった。ふたりの間に、また重苦しい沈黙が流れた。

「ただいま」

潤那だった。美莉は立ち上がり、逃げるように自分の部屋へと駆け込んでいった。

「なんだい。姉ちゃんのやつ」

廊下ですれ違ったのか、その姿を見たのか、姉の様子に潤那は軽く舌打ちをした。

「ただいま。ママ」

「おかえり」

菜穂は潤那の言葉が日常に帰る合図のように、表情に柔らかな感情を戻し、母の表情になった。もちろん、心の中にはドロドロとした混乱が渦巻いたままだったには違いないのだが。